表示設定	番号	本文	現代語訳	與謝野晶子訳	ローマ字版	注釈	出典	校訂	著作権	絵	罫線	ルビ
	☑	☑	☑	☑	☐	☑	☑	☐	☑	☑	☑	☑

第四十六帖 椎本

薫君の宰相中将時代
二十三歳春二月から二十四歳夏までの物語

2 第二章　薫の物語　秋、八の宮死去す

2.1 第一段　秋、薫、中納言に昇進し、宇治を訪問

2.1.1	宰相中将、その秋、中納言になりたまひぬ。いとど匂ひまさりたまふ。世のいとなみに添へても、思すこと多かり。いかなることと、いぶせく思ひわたりし年ごろよりも、心苦しうて過ぎたまひにけむいにしへざまの思ひやらるるに、罪軽くなりたまふばかり、行ひもせまほしくなむ。かの老い人をばあはれなるものに思ひおきて、いちじるきさまならず、とかく紛らはしつつ、心寄せ訪らひたまふ。	宰相中将は、その年の秋に、中納言におなりになった。ますますご立派におなりになる。公務が多忙になるにつけても、お悩みになることが多かった。どのような事かと、気がかりに思い続けてきた往年よりも、おいたわしくお亡くなりになったという故人の様子が思いやられるので、罪障が軽くおなりになる程の、勤行もしたく思う。あの老女をもお気の毒な人とお思いになって、目立ってではなく、何かと紛らわし紛らわししては、好意を寄せお見舞いなさる。	源宰相中将はその秋中納言になった。いよいよはなやかな高官になったわけであるが、心には物思いが絶えずあった。自身の出生した初めの因縁に疑いを持っていたころよりも、真相を知った時に始まった過去の肉親に対する愛と同情とともに、かの世でしているであろう罪についての苦悶を思いやることが重苦しい負担に覚えられ、その父の罪の軽くなるほどにも自身で仏勤めがしたいと願われるのであった。あの話をした老女に好意を持ち、人目を紛らすだけの用意をして常に物質の保護を怠らぬようになった。
2.1.2	宇治に参うでで久しうなりにけるを、思ひ出でて参りたまへり。七月ばかりになりにけり。都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音も★いと冷やかに、槙の山辺もわづかに色づきて、なほ尋ね来たるに、をかしうめづらしうおぼゆるを、宮はまいて、例よりも待ち喜びきこえたまひて、このたびは、心細げなる物語、いと多く申したまふ。	宇治に参らず久しくなってしまったのを、思い出してご訪問なさった。七月ごろになってしまったのだ。都ではまだ訪れない秋の気配を、音羽山近くの、風の音もたいそう冷ややかで、槙の山辺もわずかに色づき初めて、やはり山路に入ると、趣深く珍しく思われるが、宮はそれ以上に、いつもよりお待ち喜び申し上げなさって、今回は、心細そうな話を、たいそう多く申し上げなさる。	中納言はしばらく宇治の宮をお訪ねせずにいたことを急に思い出して出かけた。街の中にはまだはいって来ぬ秋であったが、音羽山が近くなったころから風の音も冷ややかに吹くようになり、槙の尾山の木の葉も少し色づいたのに気がついた。進むにしたがって景色の美しくなるのを薫は感じつつ行った。 中納言をお迎えになった宮は平生にも増して喜びをお見せになり、心細く思召すことを何かと多くこの人へお話しになるのであった。
2.1.3	「亡からむ後、この君たちを、さるべきもののたよりにもとぶらひ、思ひ捨てぬものに数まへたまへ」	「亡くなった後、この姫君たちを、何かの機会にはお尋ね下さり、お見捨てにならない中にお数え下さい」	お亡くなりになったあとでは女王たちを時々訪ねて来てやってほしい
2.1.4	など、おもむけつつ聞こえたまへば、	などと、意中をそれとなく申し上げなさると、	と思召すこと、親戚の端の者として心にとめておいてほしいと思召すことを、正面からはお言いにならぬのではあるが、御希望として仰せられることで、薫は、
2.1.5	「一言にても承りおきてしかば、さらに思うたまへおこたるまじくなむ。世の中に心をとどめじと、はぶきはべる身にて、何ごとも頼もしげなき生ひ先の少なさになむはべれど、さる方にても めぐらいはべらむ限りは、変らぬ心ざしを御覧じ知らせむとなむ思うたまふる」	「一言なりとも先に承っておりましたので、決して疎かには致しません。現世に執着しまいと、係累を持たないでおります身なので、何事も頼りがいのなく将来性のない身でございますが、そのようなふうでしても生き永らえておりますうちは、変わらない気持ちを御覧になっていただこうと存じます」	「一言でも承っておきます以上、決して私はなすべきを怠る者ではございません。この世に欲望を持つことのないようにと心がけまして、世の中に対して人よりは冷淡な態度をとっておりますから、立身をいたすことも望まれませんが、私の生きておりますかぎりは、ただ今と変わりのない志を御家族にお見せ申したいと考えております」
2.1.6	など聞こえたまへば、うれしと思いたり。	などと申し上げなさると、嬉しくお思いになった。	とお答えしたのを、八の宮はうれしく思召し御満足をあそばされた。

注釈89	いかなることといぶせく思ひわたりし	薫の出生の秘密。	2.1.1
注釈90	あはれなるものに	『集成』は「しみじみといとしい者と」。『完訳』は「不憫な者よと」と訳す。	2.1.1
注釈91	七月ばかりになりにけり	春の二月二十日ころに初瀬詣での匂宮を迎えに宇治に行って以来の訪問。	2.1.2
注釈92	音羽の山近く風の音も	『花鳥余情』は「松虫の初声誘ふ秋風は音羽山より吹きそめにけり」（後撰集秋上、二五一、読人しらず）を指摘。	2.1.2
注釈93	宮はまいて例よりも待ち喜びきこえ	『集成』は「八の宮は、なおさらのこと。薫以上に久々のさいかい喜ぶ風情」。「例よりも」とは死期の近いことの伏線。	2.1.2
注釈94	亡からむ後	以下「数まへたまへ」まで、八宮の詞。姫君たちを託す。	2.1.3
注釈95	おもむけつつ聞こえたまへば	『集成』は「意中をそれとなく申し上げなさるので」。『完訳』は「そちらへ話を向けながらお申し上げになるので」と訳す。	2.1.4
注釈96	一言にても	以下「なむ思うたまふる」まで、薫の返事。八宮もの申し出を応諾する。	2.1.5
注釈97	はぶきはべる身にて	『集成』は「切り捨てております身の上で」。『完訳』は「妻子など係累をもたない意」と注す。	2.1.5
注釈98	めぐらいはべらむ限りは	自分がこの世に生きております限りは、の意。	2.1.5
注釈99	御覧じ知らせむ	姫君たちに。	2.1.5

出典9	音羽の山近く	松虫の初声誘ふ秋風は音羽山より吹きそめにけり	後撰集秋上-二五一　読人しらず	2.1.2

2.2 第二段　薫、八の宮と昔語りをする

2.2.1	夜深き月の明らかにさし出でて、山の端近き心地するに、念誦いとあはれにしたまひて、昔物語したまふ。	まだ夜明けには遠い月が明るく差し出して、山の端が近い感じがするので、念誦をたいそうしみじみと唱えなさって、昔話をなさる。	おそく昇るころの月が出て山の姿が静かに現われた深夜に、宮は念誦をあそばしながら薫へ昔の話をお聞かせになった。
2.2.2	「このころの世は、いかがなりにたらむ。宮中などにて、かやうなる秋の月に、御前の御遊びの折にさぶらひあひたる中に、ものの上手とおぼしき限り、とりどりにうち合はせたる拍子など、ことことしきよりも、よしありとおぼえある女御、更衣の御局々の、おのがじしは挑ましく思ひ、うはべの情けを交はすべかめるに、夜深きほどの人の気しめりぬるに、心やましく掻い調べ、ほのかにほころび出でたる物の音など、聞き所あるが多かりしかな。	「最近の世の中は、どのようになったのでしょうか。宮中などでは、このような秋の月の夜に、御前での管弦の御遊の時に伺候する人達の中で、楽器の名人と思われる人びとばかりが、それぞれ得意の楽器を合奏しあった調子などは、仰々しいのよりも、嗜みがあると評判の女御、更衣の御局々が、それぞれは張り合っていて、表面的な付き合いはしているようで、夜更けたころの辺りが静まった時分に、悩み深い風情に掻き調べ、かすかに流れ出た楽の音色などが、聞きどころのあるのが多かったな。	「近ごろの世の中というものはどうなっているのか私には少しもわからない。御所などでこうした秋の月夜に音楽の演奏されるのに私も侍していて、その当時感じたことですが、名人ばかりが集まって、とりどりな技術を発揮させる御前の合奏よりも、上手だという名のある女御、更衣のいる局々で心の内では競争心を持ち、表面は風流に交際している人たちの曹司の夜ふけになって物音の静まった時刻に、何ということのない悩ましさを心に持って、ほのかに弾き出される琴の音などにすぐれたものがたくさんありましたよ。
2.2.3	何ごとにも、女は、もてあそびのつまにしつべく、ものはかなきものから、人の心を動かすくさはひになむあるべき。されば、罪の深きにやあらむ。子の道の闇を思ひやるにも★、男は、いとしも親の心を乱さずやあらむ。女は、限りありて、いふかひなき方に思ひ捨つべきにも、なほ、いと心苦しかるべき」	何事につけても、女性というのは、慰み事の相手にちょうどよく、何となく頼りないものの、人の心を動かす種であるのでしょう。それだから、罪が深いのでしょうか。子を思う道の闇を思いやるにも、男の子は、それほども親の心を乱さないであろうか。女の子は、運命があって、何とも言いようがないと諦めてしまうような場合でも、やはり、とても気にかかるもののようです」	何事にも女は人の慰めになることで能事が終わるほどのものですが、それがまた人を動かす力は少なくないのですね。だから女は罪が深いとされているのでしょう。親として子の案ぜられる点でも、男の子はさまで親を懊悩させはしないだろうが、女はどうせ女で、親が何と思っても宿命に従わせるほかはないのでしょうが、それでも愍然に思われて、親のためには大きな羈絆になりますよ」
2.2.4	など、おほかたのことにつけてのたまへる、いかがさ思さざらむ、心苦しく思ひやらるる御心のうちなり。	などと、一般論としておっしゃるが、どうしてそのようにお思いにならないことがあろうか、おいたわしく推察される宮のご心中である。	と抽象論としてお言いになる言葉を聞いてもお道理至極である、どんなに女王がたを御心配になっておられるかということが薫にわかるのであった。
2.2.5	「すべて、まことに、しか思うたまへ捨てたるけにやはべらむ、みづからのことにては、いかにもいかにも深う思ひ知る方のはべらぬを、げにはかなきことなれど、声にめづる心こそ、背きがたきことにはべりけれ。さかしう聖だつ迦葉も、さればや、立ちて舞ひはべりけむ」	「すべて、ほんとうに、先程申し上げましたようにすべてこの世の事は執着を捨ててしまったせいでしょうか、自分自身のことは、どのようなことども深く分かりませんが、なるほどつまらないことですが、音楽を愛する心だけは、捨てることができません。賢く修業する迦葉も、そうですから、立って舞ったのでございましょう」	「あなた様のお教えのとおりに、私も苦しい羈絆を持つまいと決心してまいりましたせいですか、自身にはそうした苦しい親心というものを経験いたしませんが、ただ一つ私には音楽という愛着の覚えられるものがございまして、それによって遁世もできずにおります。賢明な迦葉もやはりそんな心があって舞をしたりしたものでしょうか」
2.2.6	など聞こえて、飽かず一声聞きし御琴の音を、切にゆかしがりたまへば、うとうとしからぬ初めにもとや思すらむ、御みづからあなたに入りたまひて、切にそそのかしきこえたまふ。箏の琴をぞ、いとほのかに掻きならしてやみたまひぬる。いとど人のけはひも絶えて、あはれなる空のけしき、所のさまに、わざとなき御遊びの心に入りてをかしうおぼゆれど、うちとけてもいかでかは弾き合はせたまはむ。	などと申し上げて、名残惜しく聞いたお琴の音を、切にご希望なさるので、親しくなるきっかけにでもとお思いになってか、ご自身はあちらにお入りになって、切にお勧め申し上げなさる。箏の琴を、とてもかすかに掻き鳴らしてお止めになった。常にもまして人の気配もなくひっそりとして、しみじみとした空の様子、場所柄から、ことさらでない音楽の遊びが心にしみて興趣深く思われるが、気を許してどうして合奏なさろうか。	などと言って、いつぞや少し聞いた琴と琵琶の調べを今一度聞きたいと熱心に宮へお願いする薫であった。家族と薫を親しくさせる第一歩にそれをさせようと思召すのか、宮は御自身で女王たちの室へお行きになって、ぜひにと弾奏をお勧めになった。十三絃の琴がほのかにかき鳴らされてやんだ。人けの少ない宮の内に、身にしむ初秋の夜のわざとらしからぬ琴の音のするのは感じのよいものであったが、女王たちにすれば、よい気になって合奏などはできぬと思うのが道理だと思われた。
2.2.7	「おのづからかばかりならしそめつる残りは、世籠もれるどちに譲りきこえてむ」	「自然とこれくらい引き合わせた後は、若い者同士にお任せ申そう」	「こんなにして御交際する初めを作ったのですから、若い子らにしばらく客人をまかせておくことにしよう」
2.2.8	とて、宮は仏の御前に入りたまひぬ。	と言って、宮は仏の御前にお入りになった。	それから宮は仏間へおはいりになるのだったが、
2.2.9	「われなくて草の庵は荒れぬとも このひとことはかれじとぞ思ふ	「わたしが亡くなって草の庵が荒れてしまっても この一言の約束だけは守ってくれようと存じます	「われなくて草の庵は荒れぬとも この一ことは枯れじとぞ思ふ
2.2.10	かかる対面もこのたびや限りならむと、もの心細きに忍びかねて、かたくなしきひが言多くもなりぬるかな」	このようにお目にかかることも今回が最後になるだろうと、何となく心細いのに堪えかねて、愚かなことを多くも言ってしまったな」	こうしてお話のできるのもこれが最終になるような心細い感情を私はおさえることができずに、親心のたあいないこともたくさん言ったでしょう。すまないことです」
2.2.11	とて、うち泣きたまふ。客人、	と言って、お泣きになる。客人は、	と言ってお泣きになった。薫は、
2.2.12	「いかならむ世にかかれせむ長き世の 契りむすべる草の庵は	「どのような世になりましても訪れなくなることはありません この末長く約束を結びました草の庵には	「いかならん世にか枯れせん長き世の 契り結べる草の庵は
2.2.13	相撲など、公事ども紛れはべるころ過ぎて、さぶらはむ」	相撲など、公務に忙しいころが過ぎましたら、伺いましょう」	御所の相撲などということも済みまして、時間のできますのを待ちましてまた伺いましょう」
2.2.14	など聞こえたまふ。	などと申し上げなさる。	などと言っていた。

注釈100	山の端近き心地するに	『完訳』は「宮の死期の近きを擬えた表現」と注す。	2.2.1
注釈101	念誦いとあはれにしたまひて	『集成』は「心に仏を念じて真言をとなえ、成仏を願う」と注す。	2.2.1
注釈102	このころの世は	以下「心苦しかるべき」まで、八宮の詞。	2.2.2
注釈103	宮中などにて	『集成』は「見馴れない言葉であるが、仏者としての八の宮の特殊な用語なのであろう。「宮（く）」は呉音」と注す。「宮内庁（くないちょう）」など。	2.2.2
注釈104	拍子など	『集成』は「ここは、調子、リズムの意であろう」と注す。	2.2.2
注釈105	夜深きほどの人の気しめりぬるに心やましく掻い調べほのかにほころび出でたる物の音など	【夜深きほどの人の気しめりぬるに心やましく掻い調べ】－『休聞抄』は「秋の夜は人を静めてつれづれとかきなす琴の音にぞ泣きぬる」（後撰集秋中、三三四、読人しらず）を指摘。 【心やましく掻い調べほのかにほころび出でたる物の音など】－『集成』は「悩み深い風情にかき鳴らして。閨怨を訴える趣」と注す。	2.2.2
注釈106	何ごとにも女はもてあそびのつまにしつべくものはかなきものから	『集成』は「何ごとにつけても、女というものは、なぐさみのきっかけになるもので。「もてあそび」は、愛玩の対象。後宮の女性についての思い出話から、一般論に転ずる」と注す。	2.2.3
注釈107	子の道の闇を思ひやるにも	『伊行釈』は「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」（後撰集雑一、一一〇二、藤原兼輔）を指摘。	2.2.3
注釈108	女は限りありて	『完訳』は「女なりの宿運。女は結婚の相手次第、として、その相手がまともでない場合を想定した物言い」と注す。	2.2.3
注釈109	いかがさ思さざらむ	『一葉抄』は「草子詞」と指摘。『集成』は「いかにもそうおぼしめすに違いないことだ。地の文であるが、以下、聞いている薫の心中」。薫の心中を挿入句で挟み込む。	2.2.4
注釈110	すべてまことに	以下「はべりけむ」まで、薫の詞。	2.2.5
注釈111	しか思うたまへ捨てたるけにや	薫の前言「世の中に心をとどめじと、はぶきはべる身にて」（第二章一段）をさす。	2.2.5
注釈112	声にめづる心こそ	音楽を愛する心。	2.2.5
注釈113	迦葉もされぱや立ちて舞ひはべりけむ	『完訳』は「釈迦の十大弟子の一人。頭陀（乞食修行）の第一人者といわれた。香山大樹緊那羅が仏前で瑠璃琴を弾き、八万四千音楽を奏した時、迦葉が威儀を忘れ、起って舞ったという（大樹緊那羅経）」と注す。	2.2.5
注釈114	うとうとしからぬ初めにもとや思すらむ	語り手の八宮の心中の思いを推測。『集成』は「薫と姫君たちがこれから親しく付き合うことになるきっかけにしようというおつもりなのか。自分の亡きあとのことを考えた八の宮の配慮」と注す。	2.2.6
注釈115	うちとけてもいかでかは弾き合はせたまはむ	反語表現。	2.2.6
注釈116	おのづから	以下「譲りきこえてむ」まで、八宮の詞。『完訳』は「薫と姫君たちを引き合せたとする。「馴らす」「鳴らす」が掛詞」と注す。	2.2.7
注釈117	われなくて草の庵は荒れぬとも--このひとことはかれじとぞ思ふ	以下「多くもなりぬるかな」まで、八宮から薫への贈歌。「一言」と「一琴」、「枯れ」と「離れ」の掛詞。「草」と「枯れ」は縁語。	2.2.9
注釈118	かたくなしきひが言	『完訳』は「姫君への心配を、仏道者にあるまじきことと恥じた」と注す。	2.2.10
注釈119	いかならむ世にかかれせむ長き世の--契りむすべる草の庵は	薫の返歌。「草の庵」「かれ」の語句を用いて返す。「草」と「結ぶ」は縁語。	2.2.12
注釈120	相撲など	以下「過ぎてさぶらはむ」まで、薫の詞。相撲の節会は七月下旬。	2.2.13

出典10	子の道の闇	人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな	後撰集雑一-一一〇二　藤原兼輔	2.2.3

2.3 第三段　薫、弁の君から昔語りを聞き、帰京

2.3.1	こなたにて、かの問はず語りの古人召し出でて、残り多かる物語などせさせたまふ。入り方の月、隈なくさし入りて、透影なまめかしきに、君たちも奥まりておはす。世の常の懸想びてはあらず、心深う物語のどやかに聞こえつつものしたまへば、さるべき御いらへなど聞こえたまふ。	こちらで、あの問わず語りの老女を召し出して、残りの多い話などをおさせになる。入方の月が、すっかり明るく差し込んで、透影が優美なので、姫君たちも奥まった所にいらっしゃる。世の常の懸想人のようではなく、思慮深くお話を静かに申し上げていらっしゃるので、しかるべきお返事などを申し上げなさる。	別室で薫はあの昔語りを聞かせてくれた老女を呼び出して、悲しくもなつかしくも思われる話の続きをさせて聞いた。落ちようとする月は明るく座敷の中を照らして、薫の透き影は艶に御簾のあちらから見えた。隣の室には奥へ寄って女王たちがすわっていた。普通の求婚者の言葉ではなく、優雅な話題をこしらえてその人たちにも薫は話していたが、言うべき時には姫君も返辞をした。
2.3.2	「三の宮、いとゆかしう思いたるものを」と、心のうちには思ひ出でつつ、「わが心ながら、なほ人には異なりかし。さばかり御心もて許いたまふことの、さしもいそがれぬよ。もて離れて、はたあるまじきこととは、さすがにおぼえず。かやうにてものをも聞こえ交はし、折ふしの花紅葉につけて、あはれをも情けをも通はすに、憎からずものしたまふあたりなれば、宿世異にて、他ざまにもなりたまはむは、さすがに口惜しかるべう、領じたる心地しけり。	「三の宮が、たいそうご執心でいられる」と、心中には思い出しながら、「自分ながら、やはり普通の人とは違っているぞ。あれほど宮ご自身がお許しになることを、それほどにも急ぐ気にもなれないことよ。が、結婚など思いもよらないことだとは、さすがに思われない。このようにして言葉を交わし、季節折々の花や紅葉につけて、感情や情趣を通じ合うのに、憎からず感じられる方でいらっしゃるので、自分と縁がなく、他人と結婚なさるのは」、やはり残念なことだろうと、自分のもののような気がするのであった。	兵部卿の宮が非常に興味を持っておいでになる女性たちであるということを思って、自分ながらもこんなに接近していながら一歩を進めようとすることをしないのは、これを普通の男と違った点とすべきである。自然に自分への愛を相手が覚えてくれるのを急ぐこととも思われないと考えているのが薫の本心であった。しかも恋愛の成立を希望していないわけではないのである。こうした交際でおりふしの風物について書きかわす相手としては満足を与える女性であったから、宿縁のために他と結婚するようなことが女王にあっては遺憾を覚えるであろう、自分の存在している以上は断じてそれはさせたくないというふうに思っていた。
2.3.3	まだ夜深きほどに帰りたまひぬ。心細く残りなげに思いたりし御けしきを、思ひ出できこえたまひつつ、「騒がしきほど過ぐして参うでむ」と思す。兵部卿宮も、この秋のほどに紅葉見におはしまさむと、さるべきついでを思しめぐらす。	まだ夜明けに間のあるうちにお帰りになった。心細く先も長くなさそうにお思いになったご様子を、お思い出し申し上げながら、「忙しい時期を過ごしてから伺おう」とお思いになる。兵部卿宮も、今年の秋のころに紅葉を見にいらっしゃりたいと、適当な機会をお考えになる。	まだ夜の明けきらぬ時刻に薫は帰って行った。心細い御様子でみずから余命の少ないふうに観じておいでになった八の宮の御事が始終心にかかって、忙しい時が過ぎたならまた宇治をお訪ねしようと薫は考えていた。兵部卿の宮も秋季のうちに紅葉見として行きたいと思召してよい機会をうかがっておいでになった。
2.3.4	御文は、絶えずたてまつりたまふ。女は、まめやかに思すらむとも思ひたまはねば、わづらはしくもあらで、はかなきさまにもてなしつつ、折々に聞こえ交はしたまふ。	お手紙は、絶えず差し上げなさる。女は、本気でお考えになっているのだろうとはお思いでないので、厄介にも思わず、何気ない態度で、時々ご文通なさる。	お手紙はしばしば行く。女のほうでは真心からの恋とは認めていないのであるから、うるさがるふうは見せずに、微温的に扱った返事だけは時々出していた。

注釈121	入り方の月	大島本は「いりかたの月」とある。『完本』は諸本に従って「入方の月は」と「は」を補訂する。『集成』『新大系』は底本のままとする。	2.3.1
注釈122	透影なまめかしきに	御簾越しに見える薫の優美な姿。	2.3.1
注釈123	さるべき御いらへなど聞こえたまふ	主語は姫君たち。	2.3.1
注釈124	わが心ながら	以下「なりたまはむは」あたりまで、薫の心中。末尾は地の文に流れる。	2.3.2
注釈125	さばかり御心もて許いたまふことの	大島本は「ゆるひ給」とある。「ひ」は「い」の誤り。よって訂す。『『集成』は「ここまで宮がご自分から進んでお許しになることが。姫君たちとの結婚のこと。将来の世話を頼むとは、暗黙のうちに結婚を前提とした依頼と考えてよいのである」と注す。	2.3.2
注釈126	もて離れてはたあるまじきこととはさすがにおぼえず	『集成』は「しかし結婚が全然問題にならないことだとは思われず」と訳す。	2.3.2
注釈127	かやうにてものをも聞こえ交はし	『完訳』は「以下、清らかな親交をと考えもするが、それも不可能かと思う」と注す。	2.3.2
注釈128	宿世異にて	姫君たちが自分とは縁がなくて、他人と結婚する場合を想像。	2.3.2
注釈129	領じたる心地しけり	『集成』は「もう自分のものという気がするのだった。ここの文末は、地の文の形で薫の気持を直接に書く」。『完訳』は「直接話法は間接話法に転ずる。すでに自分のもの、という気持。語り手の評言の加わった文末」と注す。	2.3.2
注釈130	女は	『完訳』は「匂宮の贈答の相手、中の君。男女関係を強調した呼称に注意」と注す。	2.3.4
注釈131	はかなきさまにもてなしつつ	『集成』は「軽く応じるといったあしらいぶりで」と注す。	2.3.4

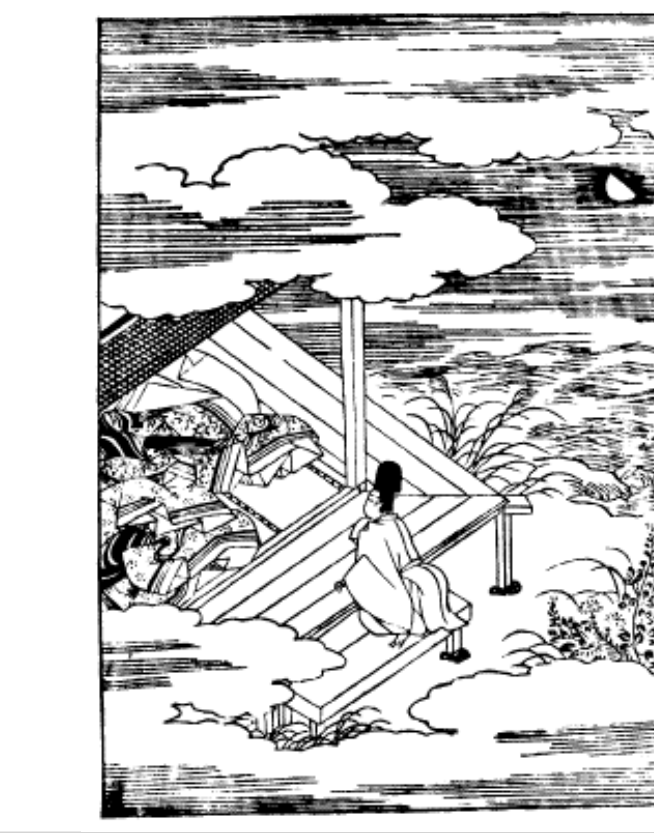
2.4 第四段　八の宮、姫君たちに訓戒して山に入る

2.4.1	秋深くなりゆくままに、宮は、いみじうもの心細くおぼえたまひければ、「例の、静かなる所にて、念仏をも紛れなうせむ」と思して、君たちにもさるべきこと聞こえたまふ。	秋が深まって行くにつれて、宮は、ひどく何となく心細くお感じになったので、「いつものように、静かな場所で、念仏を一心に行おう」とお思いになって、姫君たちにもしかるべきことを申し上げなさる。	秋がふけてゆくにしたがって八の宮は健康でなくおなりになって、いつもおいでになる山の寺へ行って、念仏だけでも専念にしたいと思召しになり、女王たちにも現在の感想と、知りがたい明日についての注意などをお話しになるのであった。
2.4.2	「世のこととして、つひの別れを逃れぬわざなめれど、思ひ慰まむ方ありてこそ、悲しさをもさます ものなめれ。また見譲る人もなく、心細げなる御ありさまどもを、うち捨ててむがいみじきこと。	「この世の習いとして、永遠の別れは避けられないもののようだが、気の慰まるようなことがあれば、悲しさも薄らぐもののようです。また後事を託せる人もなく、心細いご様子の二人を、うち捨てて行くことがまことに辛い。	「人生のそれが常で、皆死んで行かねばならないのだが、その際にも家族の上のことで、何か安心が見いだせれば、それを慰めにして悲しみに勝つこともできるものらしいが、私の場合は、このあとを託すのが引き受けて行ってくれるという人もないあなたがたを残して行くのだから非常に悲しい。
2.4.3	されども、さばかりのことに妨げられて、長き夜の闇にさへ惑はむが益なさを。かつ見たてまつるほどだに思ひ捨つる世を、去りなむうしろのこと、知るべきことにはあらねど、わが身一つにあらず、過ぎたまひにし御面伏せに、軽々しき心どもつかひたまふな。	けれども、その程度のことで妨げられて、無明長夜の闇にまで迷うのは無益なことだ。一方でお世話して来た今でさえ執着を断ち切っていたのだから、亡くなった後のことは、知ることはできないものであるが、私一人だけのためでなく、お亡くなりになった母君の面目をもつぶさぬよう、軽率な考えをなさいますな。	けれどもこんなことに妨げられて純一な信仰を得ることができなくなれば、すべてがだめなことになって、永久の闇に迷っていなければならなくなります。あなたがたを眼前に置きながらも死んで行く日は別れねばならないのだから、死後のことまで干渉をするのではないが、私だけでなく、あなたがたの祖父母の方がたの不名誉になるような軽率な結婚などはしてならない。
2.4.4	おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契り異なる身と思しなして、ここに世を尽くしてむと思ひとりたまへ。ひたぶるに思ひなせば、ことにもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女は、さる方に絶え籠もりて、いちしるくいとほしげなる、よそのもどきを負はざらむなむよかるべき」	しっかりと頼りになる人以外には、相手の言葉に従って、この山里を離れなさるな。ただ、このように世間の人と違った運命の身と お思いになって、ここで一生を終わるのだとお悟りなさい。一途にその気になれば、何事もなく過ぎてしまう歳月なのである。まして、女性は、女らしくひっそりと閉じ籠もって、ひどくみっともない、世間からの非難を受けないのがよいでしょう」	根底もない一時的な人の誘惑に引かれてこの山荘を出て行くようなことはしないようになさい。ただ自分は普通の人の運命と違った運命を持っている人間であると自分を思って、生涯をここで果たす気になっているがいい。その堅い信念さえ持てれば、長いと思う人生もいつか済んでゆくものなのだ。ことに女であるあなたがたは、世間並みの幸福を得ようと願わずに堪え忍んでいることのほうがよい。むざむざ心を動かして、いろいろと人から批難を受けるようなこともなく一生を過ごすがいいでしょう」
2.4.5	などのたまふ。ともかくも身のならむやうまでは、思しも流されず、ただ、「いかにしてか、後れたてまつりては、世に片時もながらふべき」と思すに、かく心細きさまの御あらましごとに、言ふ方なき御心惑ひどもになむ。心のうちにこそ思ひ捨てたまひつらめど、明け暮れ御かたはらにならはいたまうて、にはかに別れたまはむは、つらき心ならねど、げに恨めしかるべき御ありさまになむありける。	などとおっしゃる。どうなるかの将来の身の上のありようまでは、お考えも及ばず、ただ、「どのようにして、先立たれ申して後は、この世に片時も生きていられようか」とお思いになると、このように心細い状態を前々からおっしゃるので、何とも言いようもない お二方の嘆きである。心の中でこそ執着をお捨てになっていらっしゃったのであるが、明け暮れお側に馴れ親しみなさって、急に別れなさるのは、冷淡な心からではないが、なるほど恨めしいに違いないご様子だったのである。	お聞きしている姫君らは、どう自分たちがなって行くかということよりも父君がお亡くなりになっては人生に片時も生きていられるものでないという平生からの心持ちがあって、こんなふうな孤児になっての将来のことなどをお言いになることによって、言いようもない悲しみになって、宮は心の中でこそ娘への愛情から離れようと努力しておいでになったであろうが、明け暮れそばにいてあたたかい子育てをしておいでになったのであるから、にわかにそうした意見をお言いだしになったのは、冷酷なのではないが、女王たちにとってうらめしく思われるのはもっともと見えた。
2.4.6	明日、入りたまはむとての日は、例ならず、こなたかなた、たたずみ歩きたまひて見たまふ。いとものはかなく、かりそめの宿りにて過ぐいたまひける御住まひのありさまを、「亡からむのち、いかにしてかは、若き人の絶え籠もりては過ぐいたまはむ」と、涙ぐみつつ念誦したまふさま、いときよげなり。	明日、ご入山なさるという日は、いつもと違って、あちらこちらと、邸内を歩きなさって御覧になる。たいそう頼りなく、仮の宿りとしてお過ごしになった住まいの様子を、「亡くなった後、どのようにして、若い姫君たちが絶え籠もってお過ごしになれようか」と、涙ぐみながら念誦なさる様子は、たいそう清らかである。	明日は寺へおはいりになろうとする日、平生のようでなくそちらこちら家の中を宮はながめまわっておいでになった。一時的に仮り住居となされたまま年月をお過ごしになった、あまりにも簡単な建物についても、自分の亡くなったあとでこんな家に若い女王たちがなお辛抱を続けて住んでいられるであろうかとお思いになり、宮は涙ぐみながら念誦をあそばされる御容姿にも、清楚な美があった。
2.4.7	おとなびたる人びと召し出でて、	年配の女房たちを召し出して、	年をとった女房らをお呼び出しになって、
2.4.8	「うしろやすく仕うまつれ。何ごとも、もとより かやすく、世に聞こえあるまじき際の人は、末の衰へも常のことにて、紛れぬべかめり。かかる際になりぬれば、人は何と思はざらめど、口惜しうてさすらへむ、契りかたじけなく、いとほしきことなむ、多かるべき。もの寂しく心細き世を経るは、例のことなり。	「心配のないようにお仕えしなさい。何事も、もともと気軽な暮らしで、世間に噂にならないような身分の人は、子孫の零落することもよくあることで、目立ちもしないようだ。このような身分になると、世間の人は何とも思わないだろうが、みじめな有様で流浪するのは、至尊の血筋に生まれた宿縁に対して不面目で、心苦しいことが、多いだろう。物寂しく心細い世の中を送ることは、世の常である。	「私がどんな所にいても安心していられるように女王たちへ仕えてくれ。何事があっても初めから人目を惹かぬ家であったら、そこの娘がもう零落しようと問題にする者もない。自分らの家では、それほどしかしもう世間の人の眼中にはないでありあろうが、ともかくもふがいない堕落をしていっては御先祖にすまないのだからね。貧しい簡素な生活よりできないのはほかにもあることだから、それはいいのだ。
2.4.9	生まれたる家のほど、おきてのままにもてなしたらむなむ、聞き耳にも、わが心地にも、過ちなくはおぼゆべき。にぎははしく人数めかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世とならば、ゆめゆめ軽々しく、よからぬ方にもてなしきこゆな」	生まれた家の格式、しきたり通りに身を処するというのが、人聞きにも、自分の気持ちとしても、間違いのないように思われるだろう。贅沢な人並みの生活をしようと望んでも、その思う通りにならない時勢であったら、決して決して軽々しく、良くない男をお取り持ちするな」	貴族の娘は貴族らしく品位を落とさないで他の軽侮を受けない身の持ち方で終始するのが世間へ対しても、それら自身にも潔いことだろうと思う。世間並みな幸福を得させようとすることも、そのとおりにならないではかえって悲惨だから、決して軽率な考えでおまえがたが女王らに過失をさせるような計らいをしてはならない」
2.4.10	などのたまふ。	などとおっしゃる。	などとお言い聞かせになった。
2.4.11	まだ暁に出でたまふとても、こなたに渡りたまひて、	まだ夜の明けないうちにお出になろうとして、こちらにお渡りになって、	いよいよまだ朝早くお出かけになろうとする時にも、宮は女王たちの居間へおいでになって、
2.4.12	「無からむほど、心細くな思しわびそ。心ばかりはやりて遊びなどはしたまへ。何ごとも思ふにえかなふまじき世を。思し入られそ」	「留守の間、心細くお嘆きなさるな。気持ちだけは明るく持って音楽の遊びなどはなさい。何事も思うに適わない世の中だ。深刻に思い詰めなさるな」	「私の留守の間を心細く思わずにお暮らしなさい。機嫌よく音楽でもしてあそんでいるがよい。何事も思うままにならぬ人生なのだから悲観ばかりはせずにいなさい」
2.4.13	など、返り見がちにて出でたまひぬ。二所、いとど心細くもの思ひ続けられて、起き臥しうち語らひつつ、	などと、振り返りながらお出になった。お二方は、ますます心細く物思いに閉ざされて、寝ても起きても語り合いながら、	とも言いになり、顧みがちに寺へおいでになったのであった。ただでさえ寂しい境遇の女王たちはいっそう心細さを感じて、物思いばかりがされ、明け暮れ二人はいっしょにいて話し合いながら、
2.4.14	「一人一人なからましかば、いかで明かし暮らさまし」	「どちらか一方がいなくなったら、どのようにして暮らしていけましょうか」	「どちらか一人がいなかったらどうして暮らされるでしょう。
2.4.15	「今、行く末も定めなき世にて、もし別るるやうもあらば」	「今は、将来もはっきりしないこの世で、もし別れるようなことがあったら」	でも明日のことはわかりませんからね。もし二人が別れてしまうことになったらどうしましょう」
2.4.16	など、泣きみ笑ひみ、戯れごともまめごとも、同じ心に慰め交はして過ぐしたまふ。	などと、泣いたり笑ったりしながら、冗談も真実も、同じ気持ちで慰め合いながらお過ごしになる。	などとも言い、泣きも笑いもするのであった。遊戯に属したことも、勉強事もいっしょにして慰め合っていた。

注釈132	宮は	八宮。	2.4.1
注釈133	例の静かなる所にて	阿闍梨のいる山寺。『集成』は「例年のように、もの静かな阿闍梨の山寺で」。『完訳』は「例のごとく静かな山寺で」と訳す。	2.4.1
注釈134	君たちにもさるべきこと聞こえたまふ	『完訳』は「最期の別れになるかもしれぬという予感から、言葉が遺言めく」と注す。	2.4.1
注釈135	世のこととして	以下「なむよかるべき」まで、八宮の詞。	2.4.2
注釈136	思ひ慰まむ方ありてこそ悲しさをもさますものなめれ	『集成』は「何か安心の安まるようなことでもあるのでしたら、（死別の）悲しみも薄らぎもいたしましょう。後顧の憂いがないなら、自分もいささか心を安んじて死ねるのだが、の意」と注す。	2.4.2
注釈137	さばかりのことに妨げられて	「さばかり」は直前の「見譲る人もなく心細げなる御ありさまどもをうち捨ててむ」という、姫君たちの将来の不安をさす。	2.4.3
注釈138	長き夜の闇にさへ惑はむが	無明長夜の闇。現世に執着する煩悩のために真の悟りを得ず（極楽浄土に成仏することを得ず）、六道に輪廻することをいう。	2.4.3
注釈139	去りなむうしろのこと知るべきことにはあらねど	『集成』は「死んでしまったそのあとのことをとやかく思うべきことではありませんが」。『完訳』は「死後のことに口出しすべきでもないのですが」と訳す。「知るべき」の主体は八宮。	2.4.3
注釈140	わが身一つにあらず	八宮をさす。	2.4.3
注釈141	過ぎたまひにし御面伏せに	亡き母君の面目。	2.4.3
注釈142	おぼろけのよすがならで	『完訳』は「軽薄な人との結婚を戒めて、山里での隠棲を勧める」と注す。	2.4.4
注釈143	ただかう人に違ひたる契り異なる身と思しなして	『集成』は「ただこのように、人とは違った特別の運命（さだめ）の身の上とお考えになって。結婚というようなことは考えるな、の意」と注す。	2.4.4
注釈144	ひたぶるに思ひなせばことにもあらず過ぎぬる年月なりけり	大島本は「思なせは」とある。『集成』『完本』は諸本に従って「思ひなし」と強調の副助詞「し」を補訂する。『新大系』は底本のままとする。八宮の人生経験に基づく説得。現世は仮の世であり、あの世に真実の世がある、という仏教思想がある。	2.4.4
注釈145	ともかくも身のならむやうまでは	姫君たちの身の上の将来について。	2.4.5
注釈146	いかにしてか	以下「ながらふべき」まで、姫君たちの心中。	2.4.5
注釈147	御心惑ひどもになむ	係助詞「なむ」の下に「ある」などの語句が省略。省略によって強調される。	2.4.5
注釈148	心のうちにこそ思ひ捨てたまひつらめど	『一葉抄』は「双紙のことは也」と指摘。『集成』は「以下、姫君たちの悲しみをもっともとする草子地」と注す。	2.4.5
注釈149	明日入りたまはむとての日は	明日山寺にお籠もりになろうとする前日は、の意。	2.4.6
注釈150	こなたかなた	山荘のあちこちの部屋。仏間居間など。	2.4.6
注釈151	亡からむのち	以下「過ぐいたまはむ」まで、八宮の心中の思い。	2.4.6
注釈152	うしろやすく仕うまつれ	以下「もてなしきこゆな」まで、八宮の女房たちに対する詞、訓戒。	2.4.8
注釈153	かやすく世に聞こえあるまじき際の人は	とかく評判にされがちな宮家のような家柄でない人は。	2.4.8
注釈154	紛れぬべかめり	「ぬ」完了の助動詞、「べかめり」連語、推量の助動詞。話者八宮の主観的推量。	2.4.8
注釈155	かかる際	宮家の家柄。	2.4.8
注釈156	人は何と思はざらめど口惜しうてさすらへむ契りかたじけなくいとほしきこと	八宮には、世間の噂や評判よりも皇族として無念であり姫君たちがいとおしい、という思いが強い。	2.4.8
注釈157	にぎははしく人数めかむと	『完訳』は「豊かで世間並に暮そうとしても。零落しても皇族の誇りを失いたくないとして、「よからぬ」（普通の身分の）男を姫君の夫として迎えるなと、女房たちを戒める」と注す。	2.4.9
注釈158	よからぬ方にもてなしきこゆな	『集成』は「身分を汚すようなお取り持ちをしてはならぬ」と注す。	2.4.9
注釈159	こなたに渡りたまひて	女房の部屋から姫君たちの部屋に。	2.4.11
注釈160	無からむほど	以下「思し入られそ」まで、八宮の姫君たちへの詞。「無からむほど」は留守中の意だが、暗に死後のこと（「亡からむのち」）も含めて言っている響きがある。	2.4.12
注釈161	心ばかりはやりて	気持ちだけは明るく持って。	2.4.12
注釈162	思し入られそ	大島本は「おほしいられそ」とある。『集成』『完本』は諸本に従って「なおぼし入れそ」と「な」を補訂する。『新大系』は底本のままとする。	2.4.12
注釈163	返り見がちにて出でたまひぬ	後髪引かれる思い。姫君たちへの執着心を語る。	2.4.13
注釈164	一人一人なからましかば	以下「別るるやうもあらば」まで、姫君たちの詞。『河海抄』は「思ふどちひとりひとりが恋ひしなば誰によそへて藤衣着む」（古今集恋三、六五四、読人しらず）を指摘。	2.4.14

2.5 第五段　八月二十日、八の宮、山寺で死去

2.5.1	かの行ひたまふ三昧、今日果てぬらむと、いつしかと待ちきこえたまふ夕暮に、人参りて、	あの勤行なさる念仏三昧は、今日終わることだろうと、今か今かとお待ち申し上げていらっしゃる夕暮に、使者が参って、	御寺で行なっておいでになる三昧の日数が今日で終わるはずであるといって、女王たちは父宮のお帰りになるのを待っていた日の夕方に山の寺から宮のお使いが来た。
2.5.2	「今朝より、悩ましくてなむ、え参らぬ。風邪かとて、とかくつくろふとものするほどになむ。さるは、例よりも対面心もとなきを」	「今朝から、気分が悪くなって、参ることができない。風邪かと思って、あれこれと手当しているところです。それにしても、いつもよりお目にかかりたいのだが」	「今朝から身体のぐあいが悪くて家のほうへ帰られぬ。風邪かと思うのでその手当てなどを今日はしています。平生以上にあなたがたと逢いたく思う時なのにあやにくなことです」
2.5.3	と聞こえたまへり。胸つぶれて、いかなるにかと思し嘆き、御衣ども綿厚くて、急ぎせさせたまひて、たてまつれなどしたまふ。二、三日怠りたまはず★。「いかに、いかに」と、人たてまつりたまへど、	と申し上げなさっていた。胸がどきりとして、どのようなことでかとお嘆きになり、御法衣類に綿を厚くして、急いで準備させなさって、お届け申し上げなさる。二、三日良くおなりにならない。「どのようですか、どのようですか」と、使者を差し向けなさるが、	というお言葉が伝えられた。姫君たちは驚きに胸が一時にふさがれた気もしながら、綿の厚い宮のお衣服を作らせてお送りなどした。それに続いて二、三日もまだ宮は山をお出になることができない。御容体を聞きに出荘から手紙の使いを出すと、
2.5.4	「ことにおどろおどろしくはあらず。そこはかとなく苦しうなむ。すこしもよろしくならば、今、念じて」	「特にひどく悪いというのではない。どことなく苦しいのです。もう少し良くなったら、じきに、我慢してでも帰ろう」	「大病にかかったとは思われない。ただどことなく苦しいだけであるから、少しでもよろしくなれば帰ろうと思う。今はつとめて心身を安静にしようとしている」
2.5.5	など、言葉にて聞こえたまふ。阿闍梨つとさぶらひて仕うまつりける。	などと、口上で申し上げなさる。阿闍梨がぴったりと付き添ってお世話申し上げているのであった。	と言葉でのお返事があった。阿闍梨はずっと付き添って御看護をしていた。
2.5.6	「はかなき御悩みと見ゆれど、限りのたびにもおはしますらむ。君たちの御こと、何か思し嘆くべき。人は皆、御宿世といふもの異々なれば、御心にかかるべきにもおはしまさず」	「ちょっとしたご病気と見えるが、最期でいらっしゃるかも知れない。姫君たちのご将来の事は、何のお嘆きになることがありましょうか。人は皆、それぞれ運命というものは別々なので、ご心配なさっても何にもなりません」	「たいした御病患とは思われませんが、あるいはこれが御寿命の終わりになるのかもしれません。姫君がたのことを何も心配あそばすには及びません。人にはそれぞれ独立した宿命というものがあるのでございますから、あなた様は決して気がかりとあそばされることはないのでございます」
2.5.7	と、いよいよ思し離るべきことを聞こえ知らせつつ、「今さらにな出でたまひそ」と、諌め申すなりけり。	と、ますます出離なさらねばならないことを申し上げ知らせながら、「いまさら下山なさいますな」と、ご忠告申し上げるのであった。	こう阿闍梨は言い、いよいよ恩愛の情をお捨てになることをお教え申し上げて、「今になりまして、ここからお出になるようなことはなさらぬがよろしゅうございます」といさめるのであった。
2.5.8	八月二十日のほどなりけり。おほかたの空のけしきもいとどしきころ、君たちは、朝夕、霧の晴るる間もなく、思し嘆きつつ眺めたまふ。有明の月のいとはなやかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、そなたの蔀上げさせて、見出だしたまへるに、鐘の声かすかに響きて、「明けぬなり」と聞こゆるほどに、人びと来て、	八月二十日のころであった。ただでさえ空の様子のひときわ物悲しいころ、姫君たちは、朝夕の、霧の晴間もなく、お嘆きになりながら物思いに沈んでいらっしゃる。有明の月がたいそう明るく差し出して、川の表面もはっきりと澄んでいるのを、そちらの蔀を上げさせて、お覗きになっていらっしゃると、鐘の音がかすかに響いて来て、「夜が明けたようだ」と申し上げるころに、人びとが来て、	これは八月の二十日ごろのことであった。深くものが身にしむ時節でもあって、姫君たちの心には朝霧夕霧の晴れ間もなく歎きが続いた。有り明けの月が派手に光を放って、宇治川の水の鮮明に澄んで見えるころ、そちらに向いて揚げ戸を上げさせて、二人は外の景色にながめ入っていると、鐘の声がかすかに響いてきた。夜が明けたのであると思っているところへ、寺から人が来て、



2.5.9	「この夜中ばかりになむ、亡せたまひぬる」	「この夜半頃に、お亡くなりになりました」	「宮様はこの夜中ごろにお薨れになりました」
2.5.10	と泣く泣く申す。心にかけて、いかにとは絶えず思ひきこえたまへれど、うち聞きたまふには、あさましくものおぼえぬ心地して、いとどかかることには、涙もいづちか去にけむ、ただうつぶし臥したまへり。	と泣く泣く申し上げる。心に懸けて、どうしていられるかと絶えずご心配申し上げていらっしゃったが、突然お聞きになって、驚いて真暗な気持ちになって、ますますこのようなことには、涙もどこに行っておしまいになったのであろうか、ただうつ伏していらっしゃった。	と泣く泣く伝えた。その一つの報らせが次の瞬間にはあるのでないかと、気にしない間もなかったのであったが、いよいよそれを聞く身になった姫君たちは失心したようになった。あまりに悲しい時は涙がどこかへ行くものらしい。二人の女王は何も言わずに俯伏しになっていた。
2.5.11	いみじき目も、見る目の前にておぼつかなからぬこそ、常のことなれ、おぼつかなさ添ひて、思し嘆く、ことわりなり。しばしにても、後れたてまつりて、世にあるべきものと思しならはぬ御心地どもにて、いかでかは後れじと泣き沈みたまへど、限りある道なりければ、何のかひなし。	悲しい死別といっても、目の当たりに立ち会ってはっきり見届けるのが、世の常のことであるが、どのような最期であったのかの心残りも添わって、お嘆きになることは、もっともなことである。片時の間でも、先立たれ申しては、この世に生きていられようとは考えていらっしゃらなかったお二方なので、是非とも後を追いたいと泣き沈んでいらっしゃるが、寿命の定まった運命のある死出の旅路だったので、何の効もない。	父君の死というものも日々枕頭にいて看護してきたあとに至ったことであれば、世の習いとしてあきらめようもあるのであろうが、病中にお逢いもできなかったままでこうなったことを姫君らの歎くのももっともである。しばらくでも父君に別れたあとに生きているのを肯定しない心を二人とも持っていて、自分も死なねばならぬと泣き沈んでいるが、命は失った人にも、失おうとする人にも、左右する自由はないものであるからしかたがない。

注釈165	かの行ひたまふ三昧今日果てぬらむ	姫君たちの心中の思い。	2.5.1
注釈166	人参りて	山から八宮の使者が参上して。	2.5.1
注釈167	今朝より悩ましく	以下「[illegible]」まで、使者の詞。	2.5.2